
学園黙示録 H I G H S C H O O L O F T H E D E A D 黄金騎士参戦

断空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
黄金騎士参戦

【Nコード】

N3708N

【作者名】

断空我

【あらすじ】

ホラーの返り血の呪いで死んだ主人公 郷和義は神官と名乗る人物に異世界に飛ばされてしまう。そこにはホラーに限りなく近い存在がいた。

和義は生き延びるため、人を救うため、剣を握る。

プロローグというか死んだ後の話

唐突だけれど、俺は死んだ。

正確に言うと死ぬ直前

どうしてかというところ、子どもが車道に飛び出したのを阻止しようとした代わりに死亡という善人にもほどがあるという死に方だ。

どうかしている……。

『まあ、人としては問題ないんじゃないかねえの……』

あんた……誰だ？

俺の前に現われたのは白いマントのようなものとんがり帽子をかぶった不気味な少女。なんで不気味かって？ 服装が怪しいのと口調が男みたいなのだからだよ！

『あたしは……まあ、神官だと思っておいてくれ、説明すんのめんどい』

はつきりいって楽したがる人だと直感した。

『まあ……めんどくさいこというとあんたが事故で死ぬということはずり得ない』

いきなり人の死を否定ですか？

『てか……率直に言いますと、あんたが死んだのは返り血を浴びたからなのよねえ』

返り血って・・・俺 人を殺した事も 目撃した事もないんです
が？

『あんた・・・まあいいわ この世界の秘密を少しだけ教えてあげるわ いい？ この世界にはホラーという怪物がいたの。人の陰我を贄として人々を襲う邪悪な存在 そいつらの返り血をあんたは浴びたの 返り血を浴びたものは徐々に体内を侵食されて 最後には死んでしまう 一種の呪い あんたはそれで死んだの。交通事故は只の偶然』

いきなりそんなこといわれても・・・困るなあ。
僕は呪いというものを受けた覚えはないし。

『そこで、あんたに提案 他の世界に行ってくれないかな？』
他の世界？

『そう、そこにねホラーとは違うんだけど 限りなくそれに近い存在がいてね そいつらの駆逐を頼みたいの ああもちろん ちゃんと戦うための力をあげるし もし、断ったら このまま死を迎えるだけだからな』

つまり・・・生きるためには他の世界で戦い 断ればそのまま死ぬ
ということか なら
戦う

『よろしい・・・てか、拒否しても飛ばす予定だったし、力をちゃんと与えるから それでがんばれ』

そういわれて 俺の意識は闇の中に消えた。
後になって もらった力の大きさにかなり驚いたと言うのは内緒で・・・。

ブログというか死んだ後の話（後書き）

はい・・・また終わった作品少ないのにこんなの載せてしまいました。

ちなみに一つ小説を勝手な都合で削除しました

終わりの始まり

神官と名乗るやつに他の世界　今いる世界に飛ばされて20年は軽く過ぎてしまい

俺は郷和義という名前で教師として働いていた。

教師と言っても見習い扱いなので、クラスを持つ事がなく　歴史の担当教師として授業をするだけでそれ以外は保健室でのんびりと紅茶をいただくと言う生活を送っている。

それを良しとしない教師達から時々弄られる。のんびりしている俺が怠け者という認識をされているからだろう。

こんな俺でも教師として色々と頑張っている

平野君に銃の事を色々聞いて　撃ち方のご指導を受けたりして教師と生徒の関係をしっかりと築いている。

教師生活で少し困っていると言えば三年のとある生徒が俺に勝負を申し込んでくる事だろうか？

中高の生活の時に剣道部に所属して、自分を鍛え続けているといつの間にか全国大会出場というありえない事態に進んでいて、剣道で有名になってしまった。

その事を隠して教師生活をしようと決めていた矢先に色々あってバレてしまい。

時々、手合わせ願う！と言われるのが困る。

後は留年してしまった生徒の様子を見たり・・・煙草を吸っている生徒に見つからない場所を教えたりと教師として色々と活動しているんだ。

神官の言っていたホラーというものがどういうものなのかわからない。

そもそもあれから神官と連絡を取ることもできず、ホラーがなんなのかわからない。

けれど与えられた力がこういったものなのかは長い月日の間に見つけることが出来て大分使いこなせる事ができるようになっている。

「使いこなせるからって……持ってくる必要なかったと思うんだけど」

今、手の中に握られているのは赤い鞘に収められた小太刀くらいの剣実を言うと、これはただの剣ではない。

俺が小学生の時にランニングしていると空から降ってきた。持とうとすると中々に重たくてまともにもてるようになったのは数年前だから……結構時間がかかった。

「さあて、今日は三限目以降だから……保健室でお茶でもいたどうかかな？」

そんなことを思いながら保健室へ足を運ぼうとすると

ピンポンパンポン

『全校生徒・職員に連絡します！』

全校生徒・職員に連絡します！

中です！

現在現在校内で暴力事件が発生

生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！
繰り返します。校内で――』

「暴力事件？」

教師の緊迫した放送が途中で途切れて

[illegible]

校内に響き渡るのは死の断末魔
生徒達が恐怖に駆られて逃げようと動き出すには十分な刺激だった。
なんだか大変な事になってる？ とか思っている
バアンと教室のドアが一斉に開いて

「うわあ
あああ！」

「邪魔だどけえ！」

「ガッ あっ・・・ぐっ！」

次々と逃げ出す生徒達 それに巻き込まれて踏み潰されたり 髪を引っ張られたり まさに地獄絵図が目の前に広がっている。

「・・・酷いな」

そう思っているだけで助けようとはしない。

既に死んでいる生徒が何人かいるからだ。

「・・・？」

向こうからゆらりと誰かが現われる。

「あれは・・・数学の北鍋先生かな？」

近づこうとして止まる。

数学の先生は顔や目から血を流していて 既に『死』んでいた。

俺の姿を見たからか おぞましい姿へと変貌した北鍋先生がゆらりと俺を捕まえようと手を伸ばす。

ヒュン

空を切る音

それと同時に

ビシユアアアアアアアアアアアア！

数学の先生の顔が半分に切れてそこから大量の血が飛び出る。

腰に隠していた剣を構えて 一撃でおぞましい姿へと変わった先生を殺す。

「・・・既に死んでいた？」

脈を図って見ると死んでから少しだけ時間が経過している事に気づいた。

どういうことだ？

不思議に思っていると向こうからどんどん先生と同じような姿に変貌した生徒達がゆっくりとやってくる。

あの数は相手をするのがしんどいな

「さて・・・あの数の相手はめんどいし　ここは生存者確保を優先としますか」

こうなってしまうては敵を倒す事より、生きている人を救う方が優先順位が高い

俺は色々とお世話になっている鞠川先生がいるであろう保健室へ向かうことにしよう

そう考えて俺は歩き出す。

終わりの始まり（後書き）

今回 主人公だけが登場しました。

主人公の彼は生徒にするか悩んだ挙句 教師にしました。そのほうが色々面白い事ができそうだと思ったからです。

感想 意見 お待ちしております。

早くも合流！

さて、既に死んでいるのに動いている生徒達を蹴散らしながら保健室に向かうと

「コレは酷い・・・な」

保健室の窓ガラスは砕け散り、ベッドの上には頭を潰された死体が転がっており

「石井・・・君」

『先生・・・いくら授業ないからってここに長居するのは色々と危ないですよ？』

『それは 俺が鞠川先生と コレっという意味で？』

『そんな噂が流れ出したら脇坂先生や他の生徒達に殺されますよ？』

『・・・そんなバカな』

『強がるのはいいですけど・・・カップ持っている手が震えていますよ？』

『い、いやだなあ 石井君 俺は震えてなんか』

『あ、脇坂』

ガタッ ドタッ ！

『先生・・・・・・・・』

『いやっ！ これは・・・・・・・・その』

思い出すのは彼との何気ない会話

「なんだ・・・・・・・・これ」

ベッドの上にあった白いシーツをとって、くるくると石井君の体をぐるぐる巻きにして

「安らかに眠ってくれ・・・・・・・・石井君」

ガタッ！

現われたのは奴ら

俺はゆらりと立ち上がり

「今の俺は最悪と言っていいくらいに機嫌が悪い 近寄るなら容赦なく」

鞘から剣を抜いて

「叩ききるー！！」

一気に間合いに入り 一撃で身近にいた生徒の切り伏せる。
どさりという音と共に地面に崩れ落ちた。

さらに後ろから襲い掛かろうとしていたヤツの腹部に刃をつきたて
そのまま上へ刃を振り上げる。

腹から頭へ真っ二つに引き裂くように切り伏せて そのまま刃が次
々と敵へと襲い掛かっていく。

少しして敵は全て死に絶えていた。

「俺は聖職者でも正義の味方じゃない 俺が出来るのはあんた達を
一撃で殺すだけだ」

剣を振るって 鞘に収める。

ちらりと見えた剣には血が一滴もなかった。

「さて……」

死体を一瞥せず保健室を出る。

この後どうするか・・・保健室には鞠川先生の死体なかった。
既に奴らと化して校内を徘徊しているか……、誰かと一緒に
逃げ回っているかのどちらかだ。

「とにかく人を探すには職員室に行ってあれを取りに行かないとい
けないんだよな」

けれど、俺は職員室に行くのに少し抵抗があった。

混乱した生徒達は事情を知ろうとして教師達に突っかかる可能性が
あり、こぞって職員室に向かうかもしれない。

その中に奴らがいたら？

「でもな・・・あれがないとこの先ややこしくなるのは確定だから」

取りに行くしかないんだよなあ

ため息を吐いて、職員室に向かう

その足取りは少しばかり重かったけれど

バシユッ

バシユッ

バシユッ

職員室へあと少しという距離で何かの音が聞こえてくる。

「これは・・・銃？」

いや、こんなところに拳銃があるわけがない。

耳を澄ますとこれは

「ガス式の釘打器の音・・・」

つまり 誰かが釘打器を武器として奴らと戦っているのか？

生存者が職員室にいると言う事か

「生きている事を願うね」

他人事みたいにいながら走って先の角を曲がる。

そこにいたのは二人の人間

釘打器を構えて奴らを倒している少し太ってメガネをかけた男
もう一人はメガネで鋭い目つきのツインテールの女の子

「平野君！」

俺はつい、嬉しさのあまり叫んでしまった。

「なっ……郷先生!？」

「あんた……教師見習いの郷和義！」

「無事だったのか！ よかったあ」

俺は嬉しさのあまり身近にいた奴らを一掃してしまう。

「確か、君は高城だったか？」

「……って あんたなんでそんなものもってんのよ！」

高城は俺の持っている剣を見て驚くのを漏らす。

「え？ 護身用だけど」

「ごいっ……まあいいわ あんたも戦いなさい」

「さっきから戦ってますよ 高城さん」

平野君の言うとおり、俺は会話しながらまるで踊るみたいに奴らを切り伏せていた。

「っ！ 高城 後ろだ！」

「えっ・・・きゃあああああああああああああああ！」

高城は尻餅について、離れようとするが 奴らの方が近づいてくる。

「高城！」

別のところからバットや長い棒を持った生徒二人と木刀 そして見覚えのある顔の教師が現われる。

生きていた！という喜びもあるが、それよりも高城を助けるのが優先！と動こうとしたが

「敵が多い！」

奴らが道を阻むようにして立ちふさがり 中々 高城に近づけない。

『あれ』を使うか？ あれなら奴らを一撃で叩き伏せて

高城を助ける事ができる。

けれど、この状況でその力を使えば・・・

「くそっ！ 何をためらっているんだ！ 俺は」

余計な思考を排除して、俺は持っている剣で自分の頭上を円形に斬る。

ただそういう動作をしたただけなのに斬られた箇所から光が溢れ

小室孝は宮本麗と一緒に職員室にたどり着いた。

そこには奴らと戦っていた平野と高城がいて、木刀を持った毒島と保険医の鞠川の姿もある。

小室は持っていたバットで奴らを叩き潰していた。

高城が奴らに狙われている。助けようにも多すぎて助けに行けない。

「くそっ　なにをためらっているんだ！　俺は」

小室はその教師が何者なのか知らない。その教師は手に剣を持ち、速い動きで次々と奴らを駆逐していた。

けれど、その人ですら　奴らを倒して高城に近づくのに時間がかかる。

「くそっ！」

バットを振るって奴らの頭を叩きつぶしていると、

ブウン

小室の視界の横を金色の何かが通過した。

「なん．．．．．」

通過した何かの方向を見ると

「高城．．．大丈夫か？」

「あ．．．．．ああ．．．．．よ、」

いつのまに移動したのか、高城を優しく抱きしめている教師の姿があり

その教師がいた場所には
大量の奴らの死体が転がっていた。

奴らを全て倒すと

「鞠川校医は知っているな？ 私は毒島冴子 三年A組だ」

「小室孝 2年B組」

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですね！ わたし槍術部の宮本麗」

「あ．．．．．えと．．．B組の平野 コータです」
それぞれが挨拶をする。

S I D E O U T

なんとか・・・間に合った。

奴らを一掃して高城を助けて一瞬で元に戻ると言う早業をこなして無事高城を助ける事ができて俺は一安心して息を吐く。

「郷君 だいじょうぶだったの？」

「ああ、鞠川さん 大丈夫です」

俺の元へにつこりと笑みを浮かべてやってきたのは鞠川先生
保健室で色々とお世話になった保険校医である。

「鞠川先生 高城のこと お願いしていいですか？」

「まっかせてー」

ドン！ と自分の胸を叩いて鞠川先生が高城の様子を見てくれている間に

「その・・・平野君と・・・えっと、男子生徒 悪いけれど手伝ってくれないか？」

剣を鞘に収めて俺は平野君ともう一人の男子を呼ぶ。

「あ、はい！」

「なんですか？」

「今から 職員室の入り口を重たいもので塞ぐから 手伝ってくれないか？ 平野君と・・・えっと？」

「ああ、俺は小室孝 2年です」

「俺は教師見習いの郷和義　よろしく小室君」

「はい」

互いに握手して職員室のバリケードの準備をする。

早くも合流！（後書き）

今回 小室達と合流して 一瞬ですが主人公 力を使いました。
どうして一瞬なのか、それは後々和義の口から語られるでしょう！

職員室での会話と、（前書き）

今回・・・ヤツが！

職員室での会話と、

俺は職員室の冷蔵庫を開けて、中から水の入ったペットボトルを数本取り出す。

「平野くん パス」

「え、あ、あはい！」

水の入ったボトルを受け取ったのを確認して全員へ渡していく。

「郷先生、僕 二つも飲めないんですが」

平野君 気づいていないな。

俺は無言で顔を洗っている高城の方を指差す。

「!!」

察してくれた平野君はそーっと、覗き込むようにして高城の様子を見る。

「高城さん 大丈夫ですか？」

俺も気になっていたらちらりと覗くと、

高城はタオルで顔を拭いて、メガネをつける場面だった。

「あ・・・メガネ」

「だからなに？ コンタクトがやたらとずれるのよ!!」

「もしかして・・・照れているのか？」

「そんなわけじゃない!!」

俺に向かって高城はタオルを投げつけて否定する。
可愛い。

「鞠川先生 車のキイは？」

水を飲んで、疲れた表情をしている小室君の会話が聞こえてきた。

「あ、バックの中に」

「あれ？ 鞠川さんの車って全員乗せられるほど 大きくなかった
ですよ？」

「そうなのか？」

「うつつ コペンです」

項垂れて肯定する。一度乗った事があったから覚えていたけれど、
あの車で全員脱出させるのは難しい。・・・なら

「平野君 部活遠征用のマイクロバスってどうなってる？ そこか
ら見えるはずだけれど」

「あ、あります」

「壁のかぎ掛けにキイはある」

毒島さんがかぎ掛けの鍵を手取る。

「バスはいいけど・・・どこへ？」

「家族の無事を確かめます。近い順にみんなの家を回るとかして、必要なら家族も助けて。そのあとは、安全な場所とか探して」

「でも、見つかるかな？」

「見つかるはずよ。警察や自衛隊だって動いているはずだから地震の時みたいに避難所とかが……どうしたの？」

高城さんは設置されているテレビを見ている宮本さんをみて尋ねている。

なにやら顔を青ざめて、信じられないと呟いていた。

「麗 どうし……」

気になってテレビを見た小室君も言葉を失う。

俺はテレビのリモコンと握って音量を上げて耳を澄ます。

『各地で頻発するこの暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました。しかし、自衛隊の緊急出動については与野党を問わず慎重論が強く』

「暴動ってなんだよ！ 暴動って！」

アナウンサーの説明を聞いていた小室君が叫び画面がテレビ局から現場の映像に切り替わり

『発砲です！ ついに警察が発砲を開始しました！！ 状況はわか

りませんが……

きゃああああああああああああっ！ いやっ！ なに

っ うそっ！ たっ 助けー』

俺はリモコンのボリュームを下げる。

周りを見ると、みんな沈んだ表情をしていた、無理も無い。最後に映ったのはビニールに包まれて運ばれていた死体が起き上がって・

・

「それだけかよ……どうしれそれだけなんだよ！」

「パニックを恐れているのよ」

高城さんが一歩前に出る。

「いまさら?」

「いまさらだからこそ　よ!　いい?

恐怖は混乱を生み出し、

混乱は秩序の崩壊を招くわ

そして、秩序が崩壊したら」

「みんなパニックになり動く死体に立ち向かう事すらままならなくなる」

続けるように言う言葉に高城は頷く。

その間にもニュースは世界の情報を流していた。

全米でも同じような事が起きていて、首脳陣はホワイトハウスを離脱
現時点でモスクワは通信途絶　北京は全市が炎上しており、パリ・

ローマは略奪が横行

まだ、ロンドンは治安を保っているらしいがいつまでもつかかわからない。

「朝ネットを覗いた時はいつもどおりだったのに」

「信じない……信じられない　たった数時間で世界中がこうなる
なんて……」

宮本さんは小室君にしがみつくようにして

「絶対に安全な場所あるわよね・・・ね　そうでしょ！　きつとすぐいつもどおりに」

「残念だけど　宮本さん」

「なるわけないしー」

宮本さんを落ち着かせようとした所で高城さんが会話に横槍を入れた。

「そんな言い方すること・・・」

「パンデミックなのよ？　仕方ないじゃない」

「パンデミック？」

小室君はどうやら知らないようだ。

「感染爆発の事だよ　小室君」

「そう！　世界中で同じ病気が大流行しているって事！　高城さんがパンデミックの事について説明していると

「マツタク　ニンゲントイウノハトコトンヤヤコシイナ」

金属がこすれるような音と声が職員室に響いた。

「なっ・・・なんだ！」

小室君達は警戒するように立ち上がり、鞠川さんは毒島さんの後ろに隠れて

「オイオイ、コエガキコエタカラッテ　ソコマデオドロクコトハナ

イダロ？」

声は困った事に、僕の机の方から聞こえてきている。

ああ・・・そうだった。

俺は何のためにここきたのかすっかり忘れていたよ。

みんなが騒ぎ出す前に机の引き出しを開けてあいつを取り出す。

「ヨォ・・・、スゴイコトニナッテルミタイダナ」

「お願いだから・・・静かにしてくれないか 『ザルバ』 いま、
かぁなりやつかいな」

「郷先生」

背後から聞こえてきた声に、俺の体はびくん！と固まり、おそろお
そろ後ろを見て

「その指輪・・・喋っていたな。それはそういうアクセサリなの
か？」

「い、いや、あ、そ、そうです！ 腹話術ですよ！ 腹話術」
誤魔化すべくザルバを前に突き出して

『マツタク、ナンデコンナメンドクサイコトヲ』

「あれ・・・腹話術って、喋っている人の口は動かないんですよ
ね？」

「そうだけど 平野君」

ごまかしたと思っていたんだが、なにやら雲行きが

「いま、指輪と先生・・・同時に喋りましたね」

「あ・ア」

俺とザルバは同時に口をあけた、これにより詰み。

「へえ・・・喋る指輪 それはすごいわね」

「ええ・・・そうです・・・はい」

正座させられザルバの事を説明させられた。

さすがに神官のことをいうとどうなるかわからないので、偶然見つけたという事にしてみんなに説明して数分

ザルバは一応 みんなに受け入れてもらえた。

『ザルバ』

神官に与えられた魔導具とかいう道具の一つで、本来いた世界ではホラー探知や種類の把握などを行っていたらしい。

ここではホラーに近いものを探知と俺のサポートをしてもらっている。

しかし、ザルバは普段お喋りなのか、人目を気にせず喋ってくるので、授業の時などは職員室の引き出しの中に入れていた。

「ソレヨリ、カズヨシ、コレハドウィウコトダ？ サツキカラマチ
ノアツチコツチデケイハイガスルンダガ」

「気配って・・・あれか？」

「アア・・・モットモコノクウカンノチカクニハカンジラレナイガ」

俺は安堵の息を吐いて、みんなの様態を見る。
それなりに回復してきているようなので、鎧召喚をするかもしれないという心配はまだしなくていいようだ。

「駐車場は正面限界から近い　行くぞ！」

小室君が叫び、俺と平野君がバリケードを崩して外に出る。

「最後に確認しておくぞ　無理に戦う必要は無い避けられる時は避けろ！　転がすだけでもいい！」

「連中　音には敏感よ！　あと普通にドアを破壊するくらいの腕力はある。つかまれたら食われる。気をつけて！」

「小室君！」

「はい！」

俺は腰から剣を抜いて、二人で階段を駆け下りる。

視線の先にはタオルを巻いた男子生徒がバットを構えて目の前にいる奴らと敵対していた。

パス！と後ろから釘が発射し、奴らの一体が倒れ、剣とバットが女子生徒を襲おうとしていた奴らを叩き伏せた。

「あ・・・ありが」

「大きな声は出すな　囃まれたものはいるか？」

「え・・・い、いません！　いません！」

そばかすの女の子が否定して、彼女達を見た宮本さんが

「大丈夫みたいよ」

俺はふうーと安心する。

「僕らは学校から逃げ出す・・・一緒に来るか？」

「え・・・ええ！」

全員が頷いたのを確認して

下駄箱へ向かう。

「困ったな・・・」

俺は下駄箱を見下ろしてぽつりと呟く。

「やたらといやがる」

「見えないから隠れなくてもいいのに」

高城さんがぽつりと呟く。

「たとえば、高城さんの説が正しくても無闇に進む事はできない・・・このまま進むのも難しい・・・だから証明しなければならぬ・・・誰かが」

全員が息を呑む。しかたないな。俺が

「よし 俺が行くよ」

「小室君 俺が行くが」

「いえ、先生はここに・・・」

出て行こうとしたところで宮本さんが小室君に訴えているが俺は着

ない事に勤めた。
そのほうがいい・・・と思ったから

職員室での会話と、（後書き）

どうも、小説を設定している時にユーザー限定にしていることにも
たもや気づきませんでした。
いまさらですが・・・。

感想・意見 待っています。

少し見ない間に・・・なにがあっただ。

人を助けるのに理由は必要か？（前書き）

今回、ついに・・・

人を助けるのに理由は必要か？

奴らが徘徊する入り口を小室君はゆつくりと下りていき、奴らから見える場所に立つ。

けれど、奴らは襲い掛からずただ立っている。

「どうやら・・・奴らの目は本当に見えないようだ」

「そのようね」

俺と高城さんは情報を整理しながら様子を見る。

・奴らに視覚はない、けれど、聴覚は生きている。

・腕力は普通にドアを破壊できる程度、 掴まれた時点でOUT

・噛まれたら死亡し、奴らの仲間入り

小室君は近くの靴を遠くへ叩きつけるようにして投げた。
大きな音がして奴らはソッチの方向へ向かう。

「よし、いこう」

移動するよという合図を出して、みんなが動き出す。殿は僕と毒島さんとなって警戒しながら出て行く。

これで・・・一段落 と思っていると

カ
ア
ア
ン
と
い
う
音
が
響
く
。

音の方を見ると、男子生徒が持っていた棒（？）らしきものが天井に激突して大きな音が響いたようだ。

「走れ!!」

小室君の合図と同時に全員が走りだす。

「バカっ! どうして大声だったのよ! 身近のヤツ倒せば終わり」

「それは無理だよ、あれだけ音が響いたんだ。身近の奴らを倒しても、ぞろぞろとやってくる」

そういい、俺と毒島さんが木刀と剣で近くの奴らの頭を潰していく。

「先生の言うとおりのよ!」

棒で頭を一撃で潰して宮本さんと高城　平野君が走り出す。

「喋るより走れ！」

小室君の叫びと共に全員が走る。

バスまであと少しという距離

走っている間に奴らはどんどん集まってきた。

俺は殿として、後ろから迫ってきている奴らを次々と殺していつて
いる。

はつきりいって、人を斬ることは不快だ。

人ではなくなっているといっても・・・

今までに何度か・・・斬ってはいるけれど、

未だにその感触にはなれない。

「やあっ！」

その時、少し先を進んでいたタオルを首にぶら下げている少年がバ
ットで奴らの肩を叩いていた。

（不味い！）

振り下ろしたバットは奴らの肩 急所は頭だ。まだ生きている。
急所が外れていることにきづいて、助けようと駆け出すが

「うわぁ~~~~~っ」

殴られた奴らがタオルを掴んでそのまま少年の腕に噛み付き、他の
奴らも群がってくる。

「しまっ」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「卓造！」

「あきらめて！ 噛まれたら逃げてもむー」

卓造という奴らに噛まれた男子生徒に近づこうとする少女の腕を高
城はつかむ。

けれど、少女は高城の手を振りほどいて男子生徒の方へ駆け寄って
いく。

「なんで……なんでよ！ ちゃんと教えてあげたのに どうし
て戻るの信じられない！」

高城さんが叫び、俺はそっと、高城さんの背中を押しながら走りだ
す、

後ろは振り返らない。そんな余裕は無い……。

もし、見れば立ち止まってしまう。自分の無力さに嫌になって。

「……私わかるわ」

ぽつりと鞠川先生が呟く。

「もし世界中がこんなになってしまったのなら・・・死んでしまったほうが楽なもの」

「そんなことない！」

気がついたら俺は叫んで身近にいた奴を容赦なく叩き潰す。
頭からつま先へ向けて真っ直ぐに、真っ二つに切断する。

「人が死ぬのは自然の摂理だ・・・けれど、今のあの子がつたのは・・・ただの恋慕、死んで楽になりたいとかそういうのじゃありません、ただあの子と一緒に居たいと望んだんでしょう・・・最後まで どんな形でも」

それは逃げるというのと同じかもしれない。と頭の中で冷静な部分が答えている。

けれど、壊れかけているこの世界にまだ『愛』はあると俺は信じていたい

（勝手かな？）

（フツウノニンゲントハオオマエハチガウカラナ、イインジャネエカ？）

ザルバの言葉に俺は苦笑してしまう。

バスにたどり着き、全員が乗ったのを確認して車が動き出すまで、俺と毒島さん バスの窓から平野君が奴らを潰していく。

「・・・誰だ？ あれ」

小室君がなにかに気づいて、ソッチを見ると、バスに向かって駆け寄ってくる黒いスーツを着た男と数人の生徒達の姿が見える。

「三年A組の紫藤だな」

「・・・紫藤・・・」

ん？ 俺は後ろを見る。宮本さんが敵を見るような目で紫藤を見て
いるからだ。

(アマリヨロシクナイ フンイキダナ テカ、キヨウナヤツダ)

ザルバが何か言っているが、俺は奴らを倒しているのに精一杯。

「もう出せるわよ！」

「もう少し待ってください！」

鞠川さんの言葉に待ったとかける小室君
どうやら彼らを助けるか悩んでいるようだ。

「前にも集まってきている、そんなに長くは持てない！」

「踏み潰せばいいじゃないですか！」

「数が多すぎる このままじゃ、横転してしまう！」

そういい、前に周り 奴らを切り伏せていく。
少しでもバスの横転を阻止するために、

「あんなヤツ助ける必要ないわ！」

宮本さんと小室君の声が聞こえてくる。

こんなところで痴話げんかしないでほしいなあ

「くそっ、あとどのくら・・・」

その時、俺は視界にあるものを捉えた。

同時に鍛えられている聴覚に声が聞こえる。

『せ、先生！ 足首を挫きました！』

『おや・・そうですか、では これまでですね』

やばい！

気がついた時には奴らを見殺しにして全速力で俺は駆け出していく。視界に見える奴らを倒しては間に合わない。このままじゃ

『離さない！』

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

『ア、オイ！ カズヨシ！ ヨセツ！』

剣を上に向けて円形に空間を切り裂き、鎧召喚して 俺は奴らに食われそうになる生徒を守るために奴らの中に突っ込む。

「なっ・・・」

紫藤の驚いたような声が聞こえるが、無視する。

「――――」

奴らが俺の腕や肩に噛み付こうと掴む。その直後、奴らの腕が裂ける。

「あまり、触れない方がいい 体が裂けちゃうぞ！」

今の俺の姿は郷和義の姿ではなく。かつていた世界・・・俺が生

前（今も生きているがここはあえてスルーで）いた世界で人々を食らうホラーから守り続けていた黄金の騎士の姿となっている。その名を牙狼といい。

牙狼の鎧に人が触れた途端、肉が裂ける。

奴らに注意しながら俺は牙狼剣を横なぎに振るう。

血が飛び出て鎧をぬらす、すぐに血は落ちていく。

そして、奴らの体が一刀両断に切断され地面に落ちる。

「ザルバ 残り時間は？」

「アト・・・スウビヨウダ イソゲ！」

バスがエンジン音を出して走り出す。

紫藤の姿が見えない。アイツが乗り込んだから走り出したのか、俺は足元で震えている男子生徒の服を掴み。

「時間がねえから 掴まってる！」

一気に跳躍してバスに飛び移る。

飛び移るといっても、窓があいておらず、車体の側面に牙狼剣を突き立てる形になってしまう。突き立てるときにある程度力を抜いている。本気だとバスが半壊してしまう。

それと同時に鎧がはじけ飛んで 郷和義《俺の姿》に戻る。

やばいな、このままじゃ、この子と一緒に路面に転がり落ちて

「郷先生！」

窓が開いて平野君が手を伸ばす。

「先生、掴まって！」

「ははっ……サンキュー！」

俺は叫んで、生徒を抱える形でバスの中に乗り込む。

さて、牙狼の姿を見られてしまったが……大丈夫かな？

人を助けるのに理由は必要か？（後書き）

今回、ついにみんなの前で牙狼の姿になりました。
そして、ようやく学校脱出です。

ちなみにこの作品 ヒロインいないんですよえ。
作ろうと書いても・・・決まらないのです！

誰か、こいつヒロインでよくね？というのがいましたらアドバイス
ください。

この作品 一応アニメの時間軸に沿って進みます。

突然の別れ　すぐに再会できる事を誓って

バスは車が一台も走っていない道を走る。その道中　コンビニが見えて、奴らが宙を待っている。
そして、

「なんで、俺らまで小室に従わないといけないんだよ！」

KY如く、叫んでいるガラの悪い生徒を俺はちらりと窓にもたれながら見る。

小室君達が待ちに向かう事を説明すると、いきなり立ち上がり文句を言い出した。

周りの面々、宮本さん　高城さん　平野君　毒島さん　そして、いま名指しで文句を言われた小室君は静かにしている。

鞠川さんは運転に集中しようと思死に会話を無視しようとしているように見えた。

『シツカシ、ウルセエヤロウダナ・・・ドウスル？　オレガナニカシテヤロウカ？』

「何もしなくていいよ、そもそも、キミのなにかするは悪趣味以外のナニモノでもないじゃないか」

昔（正確に言うと、あの騎士・・・牙狼の力を使いこなそうとしてい

る時に）ザルバのイメージトレーニングというか、過去の映像を見せられた。あれは正直言くとグロテスクとホラー（意味違い）の混合だ。

あんなのと・・・あんな怪物と俺の世界にいた魔戒騎士は戦っていたんだと思うと体が震えてしまう。

「もう、いい加減にしてよ！　こんなんじゃ運転に集中できない！」

俺の隣にいた鞠川さんがブレーキを踏んで後ろで叫んでいる生徒を睨む。

睨まれた生徒は少し唸りながら自分を見ている小室君を見て、

「んだよ・・・なにみてんだよ　やろうっていうのか！！」

八つ当たりをはじめた。

見ていて・・・イライラする。

「なら、キミはどうしたいんだ？」

毒島さんが二人の間に割って入るかのように尋ねる。

「気に入らないんだ！　こいつが気にいら——」

続きを言う前に、俺と宮本さんが同時に動き出し、彼の腹部に宮本さんが持っている棒を繰り出し、俺は彼の顔を容赦なく殴り飛ばす。

「・・・最低っ」

「いい加減、黙ってろ クソガキがあ」

（スコシ・・・ムシノイドコロガワルイミタイダナ・・・クチヨウ
ガカワツテルゾ）

ザルバが脳に直接語る言葉を見捨てる。

場の空気が凍った。

多分、宮本さんだけじゃなく、俺まで攻撃した事に驚いているんだろうな

パチパチパチ

「実に見事・・・素晴らしいチームワークですね 小室君 宮本
さん、そして郷先生」

こいつ・・・

俺は横目で紫藤を睨む。

みんなは気づいていないが（助けた男子生徒は意識を失って眠っている、足に魔導火をとめておいたから傷はそろそろ治っているだろう）男子生徒を奴らの生贄にしようとしていた。自分が助かるために他者の事なんてまるでゴミみたいな目で、

こいつは油断ならない、この世界の中で、こいつほど危険なヤツはいないだろう。

「しかし、こうなるのはリーダーがいらないからです・・・ですから

リーダーが必要なんです　我々には! !」

「それで、候補者はアンタ一人きりってわけ？」

「私は教師ですよ　高城さん　そしてみなさんは学生・・・ああ、郷先生は教師でしたね」

ちらりと紫藤は俺の顔を見る。
俺はヤツの顔を睨み返して、
少しして

「どうですか　みなさん　私なら問題が起きないように手を打てますよ？」

悪魔の・・・一言をその場で放つ。

小室君以外の紫藤と一緒にいた生徒達はゆっくりと紫藤に向けて拍手をはじめた。

助かりたい・・・誰かがなんとかしてくれる。

この地獄から目をそらしたい人達は、それを排除してくれる人に期待を寄せる。その現象がここで起きた。

そして、紫藤は優雅に一礼して

「・・・というわけで　多数決で私がリーダーになりました」

「先生　開けて・・・　開けてください　私降りる！」

宮本さんが鞠川さんに近づいて叫び、

「え・・・あ・・・？」

鞠川さんが動揺している間に、宮本さんがドアを開けて外に出る。

「麗！」

「嫌よ・・・私はこんなヤツとは一緒にいたくない」

（ドウヤラ、ソウトウアノヤロウガキライミタイダナ アノジョウ
チャン）

ザルバがやれやれと言葉を吐いている。

「行動を共にできないと言うのであれば、仕方ありませんね・・・」

「アンタ何言って！」

小室君が紫藤を睨みながら宮本さんの後を追う。

俺は黙って、宮本さんと小室君のやりとりを聞くことに――
その時、視界の隅にバスが見えた。

こっちに突っ込もうとしているバスが

「小室君 宮本さん！ そこから離れろ！」

叫んで、バスの方を指差す。

それに気づいた小室君は宮本さんを壁に近寄せる。

その直後、俺達と彼らと切断するかのようにバスが壁に激突して、
数秒後爆発する。

俺は慌てて外に飛び出す。

炎に包まれながら奴らがゆっくりと起き上がるけれど、すぐに崩れ落ちた。

「小室君！ 宮本さん！」

俺は叫ぶと同時に、地面を蹴って二人の方へ駆け出そうとするが

「先生！ 危ない」

「離せ・・・離してくれ！ 毒島さん！」

羽交い絞めして叫ぶ毒島さんから逃れようと暴れる俺は

「もう、嫌なんだ！ 石井君や 卓造君を救えなかった。だから目の前で救える人がいるなら救いたい！ だから」

「・・・先生！」

炎の向こうから小室君の声が聞こえる。

俺は顔を上げる、向こうは炎に包まれていて見えない。けれど、小室君は普通に喋っていたから、どこも問題が無いと思う。

「警察署・・・東署で落ち合いましょう！」

冷静な小室君の言葉を聞いて、我を見失いかけていた俺が嫌になっ
てしまう。

「時間は・・・！」

俺の声は炎のためか、少し震えていた気がする。

「午後五時に！ 今日が無理なら 明日の同じ時間に！！！」

そういつて、二人分の足音が遠ざかっていく。

俺と毒島さんはバスに戻って、

「鞠川校医 ここは危険だ。すぐに避難しよう」

「あ・・・はい」

バスが走り出す。

俺は何も言わずに座席にもたれる。

「ダイジョウブカ？」

ザルバの言葉が聞こえてくるが、俺は何も言わない。
みんなの前で喋りたくなかった。

突然の別れ　すぐに再会できる事を誓って（後書き）

今回も短いですね、いい加減　なんとかしようかな？

さてと・・・全く感想もコメントがなく、書くのをやめようか本気で考えそうです。

悪いのか　よいのか　意見ができれば欲しいです。反応なしというのは不安です。とっても・・・
それでは・・・

こいつに手を出すな！ 怒らせると怖いぞ

あれからどれくらい時間が経過したのかわからない。

俺は真っ暗な暗闇の中にいる。

正確にはザルバが展開してくれた特殊なフィールドの中
足場は安定していて特に気にする必要は無い。・・・が、周りはよく見えない。

ちよっと歩くと鏡があり そこに映っている自分の姿を見つめる。

獅子を象った黄金の鎧を纏い、右手には牙狼剣

今の俺の姿は元いた世界で夜闇の中で人を食らうホラーから守り続けている英雄 牙狼

ベチャツ ベチャツ

俺は牙狼剣を握り締めて目の前のホラーを睨む。

そこにいるホラーは全身ヘドロを纏ったような怪物 名をアングレイ
アングレイは女性を食らう事を好んでいるホラーというのがザルバから教えられた情報だ。

俺はゆっくりと、牙狼剣を構えー

そこで無理やり現実世界へ引き戻されてしまう。

「……ん」

顔を上げるとなにやら平野君と高城さんが真剣な顔をして話している。

どうやら、今後の事のようにだ。

「おや、目が覚めたようだな 先生」

「おはよう 毒島さん 鞠川さん 外はって……聞く必要ないですね」

俺は笑いながら窓から見える外を見る。

バスは渋滞みたいなものに巻き込まれていて、その隙間を人が縫うようにして通り過ぎていく。早く安全な所に逃げたいんだろう。

けれど、この世界に安全な所なんて存在するのだろうか？

奴らがどのくらい存在しているのか、その数はわからない。

もしかしたら既に世界の大半が……

（オイ……イイカゲンニヤメロ）

なにがだ？

ザルバから頭に直接語りかけられて、俺は少し戸惑ってしまう。

（オマエ……サツキカラナニヲオソレテイルンダ？）

べ、別に恐れてなんかいない

（ウソダナ。サツキカラオマエハヒトニタイシテキョウフライダイテイル。ガロノチカラヲ……アノボウズタチニキョゼツサレルノ

ガコワインダロウ？)

わかったような 口を

(ワカルサ、オレハオマエノアイボウダゾ オマエノコトナンテナ
ンデモオミトオシダ)

ザルバの言葉に笑ってしまう。

「さて、郷先生 あなたはどうする？」

「俺……か？」

顔を上げると鞆川さん 毒島さん 平野君 高城さんがなにかを期待したような目で俺を見つめる。

みんなは俺が行動を共にする事を期待しているようだ。
実際、行動を共にする気だけれど、

「いいのか？ 俺のあの力を見ただろ？」

バスで学園から逃げ出そうとした時に見せた牙狼の姿、前にあれを
みた人は恐怖に顔を染めてその場所から逃げ出した。
助けたのに恐れられると言うのはいい気分ではない。
できるならもう二度と味わいたくないものだ。

「おや？ 貴方達 そこでなにをしているんですか？」

「残念だけれど 私達はここで下させてもらおうわ 紫藤先生」

そういった高城さんの言葉に紫藤と彼を崇拝し始めている生徒達が

顔をしかめる。

特に宮本さんにぼこられた不良の顔の歪みようといったら……
笑えるなあ

(オマエモヒトガワルイナ)

「そうですかあ……いいですよさる者を私達は追いかけません・
……ですが、鞠川先生」

「あうっ！」

紫藤にぎろりと見られて鞠川先生がビクリと震える。

「この状況で医療に詳しい人物を手放すのは非常に不味い。それに、
ここにいる生徒を見捨てるのですか？ 鞠川先生」

ヤツの今の目は獲物を狙う獣の目……気に入らない。

非常に気に入らない。それに……

気がついたら俺はゆっくりと立ち上がった。

紫藤はちらりと俺を見て、

「郷先生も言ってやってください。ここに残って生徒達をまもるべ
」

紫藤が続きをいう事は無かった。

鞠川さん 高城さんが驚きの声を上げる。

紫藤の頬を釘が通過して、バスの座席に突き刺さった。

「ひ……平野君!？」

倒れた紫藤は自分の頬を抑えながら釘打器を構えている。

「外したわけじゃない……わざと外したんだ」

「き、キミはこういうことをする生徒じゃー」

「お前……俺のことバカにしてやがったじゃねえかああ!!」

悲鳴のような彼の叫びに紫藤は激しく動揺して、そして俺の顔を見て、

「ご、郷先生!　すぐに彼を」

俺は小さくため息を吐いて

「黙ってる」

紫藤の顔に容赦なく拳を叩き込んだ。

拳は真っ直ぐに突き刺さり、紫藤の顔の形が歪み、メガネが外れて窓にぶつかって落ちる。

俺はもう一度、ため息を吐いて

「教師ぶってんじゃねえよ　クズ野郎　てめえのしたことをここで暴露する気はねえけどな、俺の目の前で教師ぶるなら次は――」

鞘から剣を抜いて、地面に突き立てる。

「ひっ!？」

突き立てた場所は紫藤の指と指の間。

「容赦なく切り伏せてやるから覚えておけ・・・平野！　ここは俺とお前で足止めするから毒島達はバスから降りろ！」

（アアア・・・アノメガネ　カズヨシノゲキリンニフレヤガッタ）

俺と平野君はゆっくりと、不良が襲い掛かってこないように、じりじりと下がっていき、最後は飛び降りるようにしてバスから降りる。

「そ、それにしても先生　あんなことするんですね」

隣を歩いている平野君が驚きの声を漏らす。

「まあ・・・腹立っていたし」

そこまで、驚かれるかな？

てか、なにか期待するような目で見られても

「平野君・・・どうし」

「あの先生！」

「ん？」

「ぼ、僕達チームなんですから、名前とかで呼びませんか？」

チームかぁ、確かにそうかもしれないが、いいのかな・・・俺みたいなのがチームにいて

（イイカゲン、ソナアホナカンガエ ステロ）

どういふことだ？

（コイツラガオマエノチカラヲミテキョゼツスルトオモウカ？）

否定しようとしてやめた。確かにザルバの言うとおりで。考えたら簡単だ。こいつらは俺のあの姿を見ても拒絶しないだろう。拒絶したら・・・そのときは

「そうだな、コータ 行くぞ」

「はい！」

俺と平野君・・・いや、コータは三人に追いつくべく走り出す。

こいつに手を出すな！ 怒らせると怖いぞ（後書き）

今回、紫藤には痛い目にあってもらいました。
もっと、酷くすればよかったか 少し悩みました。

再会 けれど、突然の（前書き）

久々の更新です。

再会 けれど、突然の

OTHERSIDE

そいつは突然生まれた。

どうしてなのかその理由はわからない。

そもそも、ゲートをくぐっていたらいつのまにかこの地にたどり着いたのだ。

しかし、このままでは自分の命が危ない。

どういうわけか、この世界は自分の住んでいた世界とは異なる。

すぐに気づいたけれど、周りに使えそうな肉体が存在しない。

ヤバイ どうする？

焦りながら探していると静かに眠るかのように死んでいる肉体があった。

コイツは使える。

そう気づき、ゆっくりと地べたを這いながら、ゆっくりと体の中へ侵入していく。

少しして死んでいた遺体がびくん！と震え上がり、死んでいた少年がゆっくりと起き上がる。

「さて……どうしようか」

SIDE OUT

「それにしても、運よくというか、普通に歩いていても奴らがいないのは運がいい」

「あっちの方で大きな騒ぎがあったみたいだからあっちへ向かって
いるみたいよ」

先を歩いてる高城さんと毒島さんがそんな会話をしながら周囲を警戒している。

現在の状況を言いますと、警察署へ向かうべく橋を探しています。
いくつか見つけたんだけど、警察が既にバリケードを展開して
いて通れそうにない。

無理に通ろうとした学生が放水車の水を受けて川の中へと落ちて
いった。

多分、あれは助からないんじゃないかと思う。

遠くから見えていた俺はそう感じた。

ちなみに毒島さん達は見ていない。正確にいうと、見えなかった。

なぜかって？ 俺の視力が異常すぎるから、鍛えていると自然と
調整できるようになっていて、人間を超えているくらいの視力レベ
ルです。

自分で言うのもなんだけれど、恐ろしいや。

警察は奴らとそれに感染しているであろう人達をこれ以上遠くへ行

かせないようへの対処なんだろうが……これ以上悪化するんじゃないだろうか？

「郷さん、どうですか？」

隣にいるコータが小声で俺に尋ねる。

周りを調べるが奴らの気配は感じない。

大丈夫！と合図を送ると

「きゃうう！」

「えぶう！」

鞠川さんがバランスを崩して、コータに倒れる。幸い奴らは近くにいなかったからよかったものの、もし、いたらとんでもないことになっていただろうなあ、

コータ君はまあ、仕方ないか 思春期なんだし、鞠川さんの胸に嬉しそうに顔をうずめている。

「このデブオタ！ すぐにどきなさい！」

高城さーん、そんな大きな声を出していると、奴らが近づいてきますよ？

そんなことを考えながら、回りへ視線を動かす。

(…………ン?)

「どうした？」

ザルバが反応したのに気づいて尋ねるが、

「イヤ・・・ナンデモネエ（キノセイカ・・・ヤツラガコノセカイニイルワケガナイ）」

それが数時間ほど前の出来事

現在、俺達は

「邪魔だあ！」

叫ぶと同時に近くにいるヤツの顔にドロップキックを叩き込む。

ベキヤッ！と鼻の形が大きく変わり後ろに倒れこんだ。

とどめはさせていない　あくまで距離を置くために蹴り飛ばしたから俺は剣を構えなおして起き上がったヤツを見据える。

強く蹴ったからか歯がぼろぼろと口から零れ落ちていく。

これが生きている人だったら少しだけ申し訳ない気分になるんだけれど

『スデニシンデイルカラカンケイネエナ』

「お願いだから人の心勝手に読まな・・・いでつと！」

襲い掛かろうとしたヤツの頭を横薙ぎに切って、次の敵を切ろうと構えた時だった。

「きゃああああああああああああああっ！」

「しまっ・・・！」

「っ！」

後ろから悲鳴が聞こえて振り返ると鞠川先生のところに奴らが近づいていた。

すぐに助けに行きたいが奴らがまだ目の前にいるから近づく事ができない。

コータ君が釘打器を構えるがマガジンがないのだろう、なににもできない様子だ。

『オイ、ドウヤラシンウチトウジョウノヨウダゼ？』

「え？」

俺がザルバの言葉に尋ね返そうとすると

バイクが橋を飛び越えるかのようにいきなり現われる、バイクは俺の頭上を飛んでいって、少し後ろに着地して、ヤツらを何体かなぎ払い

「平野！」

バイクに乗っていた小室君がコータ君に拳銃を投げる。
それを受け取ったコータ君の顔が・・・大変失礼だがワルな顔に

変貌して鞠川校医と高城さんを襲おうとしたヤツラを俊殺した。
す・・・すごい、

俺は呆然としているとすぐ横を棒が通過した。

「先生 油断しすぎですよ」

「す、すみません」

ヤツらの頭から棒を引き抜いて宮本君が微笑む。
大人以前に男してなんか情けない気分だ。

OTHERSIDE

少年は橋の上で繰り広げられていた戦いを見てにやりと微笑んだ。
先ほどから街を歩いていたが中々たべものが見つからず困っていた。
食べ物形の形をしたものはあったのだが、不味すぎて食べられるよう
なものじゃない。

少しお腹がすいてきて我慢の限界が近づいてきていたのだが

「見つけた・・・」

橋の上にたべものが並んでいる。その数は7
我慢の限界がきたのか少年は地面を蹴る。

地面を蹴った所で“普通”の人間なら、ほんのちよつと飛ぶ程度なのだが、

この少年は文字通り飛んでいた。

「くはは・・・」

笑いながら少年は橋に向かって下りていく。
自分の空腹を満たすべく

SIDE OUT

「先生！」

宮本さんが鞠川校医に抱きつく。仲いいのはいいけれど・・・鞠川
さん　なんか子どもをあやしている母親みたいに見えますよ？

「先生！」

二人を見ていると俺のところにも小室君が駆け寄ってくる。

バスでの騒動から別れて一日くらいしか経過していかないけれどかなり久しぶりの再会のように感じてしまう。

「無事でよかった。心配していたよ？」

笑うと、小室君も微笑んだ。

「但し 未成年がバイクに乗るのはあまりよくない」

「き、厳しいですよ！」

小室君にヘッドロックをかけて俺は微笑む。

「小室おおお！！」

俺と小室君がじゅれあっていると、コータ君がすごい勢いで詰め寄ってきた。

どうやらいま手元にある銃のことで色々聞きたいらしい。

「さて・・・これからどうする？ 目的の場所へ以降にも封鎖されていてダメだし」

「そうだな・・・、みんなも疲労の色が見えてきているからとりあえずどこかで休むというのはどうだろう？ できれば風呂にも入りたい」

毒島さんの意見には激しく賛成できる。

着ているこのスーツ実は、かなり血まみれになってきていて気持ち悪い。

至近距離でヤツラを切り伏せているから返り血がべっとりと付着しているのだ。

剣だとすぐに殺せるけれど デメリットも存在する。服が汚れて気持ち悪いとか

「それはいいけれど、どこへ？」

そこで全員言葉が詰まる。

ここらへんはあまり詳しくない。だからどこか休まる場所なんてすぐに思いつくわけがないからだ。

「ねえー 一日休む場所があるのよねえ？」

なにか考えているのか顎に指を当てて鞠川校医が尋ねる。

「ええ・・・」

「なにか心当たりでも？」

毒島さんが尋ねると

「ここから少し先に友達の家があるの 鍵は持っているから大丈夫！ それにお風呂も大きいし」

わざわざお風呂の話はださなくてもいいのにと思ったけれど中々にいい提案だと思う。聞いた住所はここから少し歩くだけだし

「どうする 小室君？」

「行きましょう！」

小室君の一言で全員が頷き 歩き出す。けれど、

『トマレ！！』

ザルバの一言で全員が『えっ』という表情をしていると、すぐ近くに人が落下した。

落下といっても転落とかそういうものではない 足から落ちてきて奇麗に着地している。

突然の出来事に全員が呆然としていた。

もちろん、俺もいろんな意味で呆然としている。

「どうして・・・？」

「お腹すいた・・・」

俺の目の前でぺろりと舌を出して石井君が残忍な笑みを浮かべている。

あの時、俺は保健室で死んだ石井君を見て 自分の無力さが嫌になった。

別に全ての人間を救える正義の味方になりたいわけじゃない。

知り合いが救えない事が嫌だった。

前の世界・・・俺がいた世界は普通だったけれど、『いじめ』や『虐待』といった様々な問題があった。

別に、俺がいじめを受けていたとか虐待されていたというわけじゃない。

ただ――

「どうして、キミが生きているんだ？」

俺は呆然と目の前の石井君に尋ねた。

石井君はうーんと思えるような素振りをして

「ああ、この体のことか」

と、変なことを言い出した。

「石井君　なにを・・・」

「ΛΡΠΣ○#Л　бжФД（この体は死んでいる　借りているだけだ）」

石井君の顔の部分が真つ二つに裂けて不気味な怪物の顔が現われた。それをみて、小室君や毒島さんは顔を引きつらせ　宮本さんと鞠川校医は互いに抱きつき、高城さんとコータ君は信じられないものを見るような表情をしている。

そして、俺は目の前の人物がなんなのか気づいてしまった。

「ザルバ・・・」

『アア・・・マチガイナイ　クソッ　ドウシテコイツガコノセカイニイルンダ!』

忌々しげにザルバは舌打ちをする。

以前　神官から聞いていたとはいえ　遭遇するのは初めてだ。
太古の昔から暗闇から人々を食らい、恐れられた魔物
名をホラーという。

「長い話はめんどい・・・だからさあ 食わせてくれ」

まずい！

俺は前にいた小室君と毒島さんを横に突き飛ばして、手を広げて襲い掛かってくる石井君の姿をしたホラーの胸部に一撃叩き入れる。

「ぐふっ！」

ホラーは口から液体を流しながら後ろへ吹き飛ぶ。

「ザルバ・・・あれは助けられないのか？」

『ムリダナ アレハスデニシンデイル。カワヲカブツテイルニスギ ナイ』

ギリッと握っている鞘に力が入る。

ゆっくりと起き上がる石井君の体は腐敗が始まっているのか眼球が零れ落ちて片方の目からは赤い液体がとめどなく流れ出ている。服の中からも異臭が漂ってきていた。

・・・はやめにケリをつけよう。

そう、決めた俺は剣の刃の部分を上に向ける。
グルンと円を刃で作った。

直後円が輝いて頭上から光が一気に降り注ぐ。
そして、俺の姿は変わる。

SIDE 小室

僕は目の前で起きた事が信じられなかった。

同じ制服を着た男子生徒の顔がぱっくりと裂けて不気味な化け物みたいな顔が現れた時は驚いた。

さらに驚いたのは郷先生が剣を上へ向けたと思ったたら円をつくった。

その直後 光が降り注いでそこには黄金の鎧 獅子を模したような顔をした一言で言うなら『騎士』みたいな存在がそこにいた。

『ΦΔЖΔ! (キサマ 魔戒騎士かあ!)』

男の子がわけのわからないことばをだして飛び掛る。

騎士は剣を持っている手を前に突き出して

一撃を放つ。

一撃・・・そう、一撃だった。

たった一撃で生徒の体はぐにやりとおかしな形に変わって地面に大きくバウントする。

「その姿で変な言葉を吐くな」

騎士が緑色の目で睨んでいると ボゴリと体が膨れ上がり生徒の体を突き破るようにして鳥みたいな怪物が現われた。

『アレハガーゴイルダナ・・・ダガ、スコシバカリシュルイガコトナル』

「そうか・・・まあ、ホラーなら全て切り伏せる」

鞘から金色の剣をゆっくりと引き抜いた。

ガーゴイルと呼ばれた怪物は奇声を上げて大きな羽を広げて襲い掛かる。

僕らはその姿を見て一歩 後ろへ下がった。
なのに

「キサマを斬る！」

下がらず逆に前へ踏み出してガーゴイルの体を一撃で真つ二つに裂いてしまう。

ガーゴイルの体が爆発して僕らのすぐ近くに大量の血が飛び散る。

「うわっ！」

驚いてその場から離れる。誰も返り血を浴びていないみたいだ。

カチンという音が聞こえて顔を上げると騎士は僕らに背を向けている。

なぜだか その背中は何にかをいいたそうでいえない そんな雰囲気を出していた。

SIDE OUT

再会 けれど、突然の（後書き）

久々の更新です。しかもホラー登場

イメージは零が倒した？鳥を思い出してくれればいいです。

気になる人は本編をチェック！

進んでいるようで進んでいないこの話を待っていてくれる人・・・
すいません 今度いつ更新するかは決めていません。

アニメが終わってしまい。原作を買う余裕もなく

永遠に更新しないというわけじゃありませんが、不定期更新になる
かもしれません。

・・・まことにすいません。

神官のきまぐれ(前書き)

かなり短いです。

神官のきまぐれ

「ああ、つまんねえ」

神官は肘掛け椅子に座ってめんどくさそうに胡坐をかいている。

目の前には自身が転生させた郷和義という名前で生きており、自分が与えた力を使う瞬間をみて呟いていた。

彼女が呟くと同時に誰もいなかった空間に一人の男が現われる。

ボロボロの黒コート　そして神官からは見えないが懷には二本の銀色の剣が仕舞われていた。

「なあ、どうして俺が呼ばれたの？　俺　ここの管轄じゃないはずなんだけれど？」

「ああ？　あんたからすれば管轄とか関係ないでしょ？」

「まあ、そうだけどさ、あんたと関わるとややこしい方向へ事態が進むから俺は関わりたくないだけどさ？」

「ざーんねーん　ここに来たからにはもうあんたに拒否権はないのしゃー」

「はぁ・・・」

『アキラメナサイ　ゼロ　デナニツイッテモムダヨ』

“ゼロ”と呼ばれた男はため息を吐いて神官の顔を見る。

男からは神官が見ている映像が見えない。

今、映像は牙狼がガーゴイルを切り伏せる場面だ。

「さあて、本題に入ろうかしらー　色々と遠まわしに言うのめんど

くさいから率直に言うわね？」

神官は天使のような微笑みを浮かべる。

ケイカイセヨ この時は決まってるくでもないことへ事態が進んでいくのだと男は覚悟を決めた。

「あんたの魂の一部を別世界へ送りたいからよこせ」

「・・・は？」

男はぽかんとした表情を浮かべる。

てつきり10000のホラーを一人で駆逐しろとかいう恐ろしい命令を受けるのかと思っていたらその程度の事なのか？と思ってしまう。

事実 この男 過去にいくらか三人の子どもにより寿命を減らされている。

その程度くらいなら別に問題ない。

「別にいいけど、何に使うの？」

男が尋ねると神官は微笑んで

「愛しい 愛しい子へのおみやげ・・・かなあ？」

そういつて、神官は指を鳴らすと同時に男の体から銀色の砂みたいなものが少し零れ落ちる。

砂はそのまま小さな石みたいなものになり、神官の手の中に納まり、

「んじゃ、あんたは帰れ あの爺にばれたら色々とうるさいから」

「はいはい・・・それ、変なことに使わないでよ」

「使わない使わない 愛しい坊やのために使うだけだから」

男が消えた後、神官は人の形をした人形に石を埋め込む。

ドクン！ と人形が脈打ち 次の瞬間には完全な“人”の姿へと変わった。

それは先ほどまでいた男にそっくりだった。否 魂を入れたから男とほとんど大差ない

本体が人形であるという事を除けば――

「さて、早速だけど あんた異世界へいってもらうわ そしてあの坊やを鍛えなさい 方法はあるたの頭に浮かぶやり方でいいわ そうだ・・・名前もついでにあげるわ あんたの名前 どうせだからオリジナルと同じで零と名乗りなさい」

神官のきまぐれ（後書き）

なにを血迷ったのかオリジナル設定満載でとある人物を郷がいる世界に飛ばしてしまいました。

こいつがいつ登場するのかは未定です。

なんだろ・・・すごいオリジナルに進んでいく予感が・・・

あまりよろしくない空気の中で（前書き）

感想・意見まってまーす

あまりよろしくない空気の中で

「え、いいんですか？ 俺が先に入っちゃって」

「ええ、みんなまだ忙しいみたいだし・・・郷君 疲れているでしょ？ ささ 入っちゃって」

鞠川さんに背中を押されて俺は風呂場の入り口へおいやられる。

現在、俺達は鞠川さんの友人の家で休んでいる。他人の家で休むなんて今までの世界なら誰もが遠慮するだろうが、現在の状況で我俣なんかいってられない。

てか、この家に入って我俣をいうヤツがいたら見てみたい。

鞠川さんの友人の家・・・とてつもなく大きい 独身らしいが一体なにをどうやればここまで稼げたのだろうか？

しかも、すぐ隣の駐車場には装甲車もどきが停車している。

俺は血まみれになった服を水でぬらして軽く洗う。それだけで血が落ちることはない。

「俺って・・・何人殺したんだろうな」

『サアナ、ソノチノナカニハオマエノシタシカッタヤツノチモアルカラナ』

ザルバが俺を慰めるなんて事はあまりしない。今回は俺を叩き落すような言い方だ。

風呂に入る時もザルバは一緒に付けてはいるという決まりはない。

外すのを忘れていた俺はザルバを抜いてドアを開けて出る。

この時、外に誰かいなか注意していればよかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

現在、俺の格好はタオル一枚の状態

そして、目の前には血まみれの制服を着た高城さん
俺の上から下までゆっくりと一瞥したあと――

「こんのお 変態がああああああああ!!」

「えっ!? なんで俺が怒られるの!?!」

「そんな格好でうろつかないでよ! 女子がいるんだからそんな格
好でうろついていたらコロスわよ!」

「す、すいません!」

どうやら、今の俺の格好は彼女にとって・・・というか、全ての女
性にとって不快なものなんだろう。

少し慌てて、ドアを閉める。

ドアの向こうでは高城さんがなにやらぶつぶつと小言を呟いていた。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

いきなり視界が歪んだ。

『コンナジヨウキョウデワルイガ・・・オレモホキュウガヒツヨウ
ナンデナ スコシオオメニモラッタゾ』

ザルバ呟きに文句を言う暇もなく俺は意識を手放した。

小室SIDE

俺と平野が武器を探し終えて一段落していると高城の悲鳴？ 怒声
のようなものが聞こえてきた。

「なんだろう？」

「さあ？」

俺達は気になり階段を下りて声のほうを見る。

「高城 なにかあったのか？」

「うっさい！ 黙ってろ ブタオタが！」

「えっ！？ す、すいません」

怒鳴られてぺこぺこ頭を下げる平野 俺達の横を通過して高城は
ずんずんと歩いていく。

なんで、平野は謝ったんだろうか？

俺達は高城がきた方向へ足を運ぶ・・・って！

「せ、先生！？」

そこはバスルームで、一人の人間が倒れている。

中世的な顔立ちで引き締まった肉体に男なら羨ましいと思ってしまう。
う。

けれど、今はそんなことをいっている場合じゃない。

俺たちの目の前には――

タオル一枚で鼻血を流して気絶している郷先生の姿だった。

すぐそばには不気味な顔のアクセサリー・・・ザルバだったか？

それが転がっている。

「どうする？ 小室」

「とりあえず、服を着せて上へ連れて行こう」

「うん・・・」

よっころせつと掛け声を上げて先生を寢室へ連れて行く。

ちなみに先生のスーツはほとんど血まみれで着せるのはよくないと思います。平野が偶然発見した男物をズボンはかす。

「先生・・・疲れていたみたいだね そのまま寝たみたいだ」
平野が先生の顔を覗き込んで、そのままベランダに出る。

ちらりと先生の寝顔を見る。中世的な顔だち こんな人があんな化け物を狼みたいないな姿をして倒したなんてとても信じられない。
それにしても・・・あの怪物は一体なにものなんだろうか？

『シリタイカ？』

「え？」

『ココダ ココ』

声のするほうへ顔を動かすと、さっき机に置いたザルバが口をぱくぱくと動かして喋っている。

前に喋っている所を目撃したけれど やっぱりまだ慣れないなあ。

「なんだよ・・・」

『シリタイダロ？ アノカイブツガナンナノカ』

「知っているのか？」

『マアナ、アレハホンライナラコノセカイニソンザイシナイハズノモノナンドガナア・・・ドウシテココニイルンダカナア・・・』
昔を懐かしむような声を出してザルバはこっちを真っ直ぐ見た。
闇で塗りつぶされているような目に見られて少したじろぐけれど、
睨み返すようにしてザルバを見る。

「あの怪物がまた現われるかもしれないんだろ？ 今後の対策に必要になるかもしれない、出来るならもう二度とあんなのとは遭遇したくないけれど」
うつ・・・顔が裂けるところ思い出して吐き気が・・・。

『シカタネエナ・・・スコシムカシバナシミタイナハナシヲスルガツキアエヨ』

光あるところ漆黒の闇あり 古の時代より、人類は闇を恐れたし
かし、暗黒を断ち切る騎士の剣によって人類は希望の光を得たのだ
というザルバの言葉から長い話が始まった。

『アノトキ ソウグウシタカイブツノナマエハ“ホラー” ヒトノ
“インガ” ニトリツキ ヒトヲクラウカイブツダ。ホラーニモサマ
ザマナシュルイガイルガ、コンカイハシヨウリヤクシテオク・・・
ソノホラーヲカルノガ“マカイキシ”』

「まかいきし・・・って、あの金ぴかの狼のことなのか？」

『アア・・・アレノナマエハ“ガロ” マカイキシノナカデモオウ
ゴンキシトイウショウゴウヲモツソンザイ』

「がろ・・・？」

ザルバの口調からどういう言葉なのか察する事ができないけれど、
あの怪物が昔から存在しているという事だけは理解した。

「ザルバ・・・喋りすぎだ」

声のほうを見ると、さっきまで寝ていた先生がむくりと起き上がり
ザルバを睨んでいる。

SIDE OUT

目を覚ますとザルバが小室君に俺のいた世界の存在 ホラー 魔戒
騎士 牙狼について喋っていた。

「ザルバ・・・喋りすぎだ」

ザルバを睨むようにして呟くと

『ソコノコゾウガシリタガッテイタカラナ・・・オシエテヤツタダ
ケダ』

悪びれた様子もなくザルバが答える。

あまり、俺がいた世界について語ってほしくはない。異世界から転
生した事がばれるからというわけじゃない。他所の世界の裏の部分
を知ることにはよくないからだ。

実際、この世界にも政治家の汚職とかそういう“知ってはいけない
部分”というものが存在している。

それと、比べるとホラーのほうがかなり厄介で悪質なのだが・・・
。

「小室君 さつき聞いたことは忘れてくれ……」

「無理ですね……先生」

いきなり否定された。

おいおい、なんかよろしくない空気が？

「どうしてかな？」

「あの怪物が一体だけという証拠はありません。もしかしたら沢山でてるかもしれない。僕達は生き残るためにいろいろな事を考えないといけないんです！ だから……」

「生き残るためでも……ホラーの存在は知る必要がないんだ……いら、知らないでいてくれ」

「どうして！」

「……ザルバ あれを見せてやれ」

『オイオイ……アレハトクンヨウノタメデアッテ、コイツノクチヲフウジルタメモノジャネエゾ』

「いいからやれ……」

俺はザルバを手にとつて小室君の手を掴む。

怪訝な表情をしている彼の指にザルバを入れる。

ザルバを媒介として過去に俺が“見せられた”ホラーと魔戒騎士の戦いの映像が次々と流れ込んでいく。

普通の表情をしていた小室君の顔色が段々と悪くなっていった。

半分もいかないうちに足が震えて立てなくなりそうになる。

俺がザルバを外すと、がたんと崩れ落ちた。

「わかっただろ？　これがホラーという存在の恐ろしさだ。だから知ってほしくない理由なんだ・・・それに、もしホラーがまた現われたなら俺が斬る。そのために俺は魔戒騎士とやっているんだ」
小室君が顔を上げて俺を見る。なにかいいたそうな表情をしているけれど、言葉が出てこないようだ。
俺はザルバを机においてそのまま寝室を出て行く。

OTHR SIDE

さてさて・・・到着したはいいけれどさ

「なんで、夜で、暴動みたいな事が起きてんだよ」
目の前で警官隊がバリケードみたいなものを展開して“奴ら”の動きを封じ込めている。

だがそれも限界が近づいているみたいで、車を並べて奴らを排除しようという動きをとり始めている。

そんな中　奴らを病人扱いして保護するべきだ！という旗を持った団体が警官達に詰め寄っていた・・・いや、詰め寄っているというよりも文句を延々と述べているみたいだね。

「ふうん・・・状況が状況だけにバカがのさばっているみたいだね」

こういう時にオリジナルを論すようにパートナーの魔導輪が文句を言ったりするみたいだけれど、生憎　俺には魔導輪がない。あるのはソウルメタルの剣が二つのみ

一応 オリジナルと同等の力を持っているが、魔戒馬はまだ取得していない。

「さてさて・・・神官の気に入っている愛しの坊やってのはどこに
いんだろうな」

ぶらぶらと夜道を歩きながら俺は探し始める。

S I D E O U T

あまりよろしくない空気の中で（後書き）

今回、色々と説明してるようで全く説明していません！

読み直していて気づきました・・・。

ザルバが説明役だとカタカナ表記にしているからこうなってしまう。
牙狼に関しての説明はまた近いうちすると思います。

くおまけく

「先生は・・・あんなものを見てきたのか？」

『イヤ、アレハトアルキシノタタカイダ。アイツハサキホドノタ
タカイガハジメテホラートノタタカイダ・・・コワカッタカ？』

「怖い・・・でも、少し納得できた」

『ン？』

「どうして、先生があゝの怪物を斬った後、いまにも泣き出してしま
いそうな顔をしていたのか・・・あんな映像を見てしまったら辛
いだろうな」

孝の脳裏には金が欲しいあまりにホラーに憑依された女 自分の醜
い顔にコンプレックスを抱いて他者の美しい顔を憎み続けた女
自分の芸術を追及していった男

「あんなのを見せられたら人が嫌になるはずなのに・・・先生はちゃ
んと向き合っている・・・そこがすごいと思ってさ 俺はこの世界
に状況にまだ向き合えていないから・・・」

『ホオ・・・タダノガキカトオモツタラ イロイロトカツトウシテ
ルジャネエカ』

「ほうっておいてくれ！」

ザルバに言い返して孝は立ち上がる。

「先生に謝ってくる。僕の言い方が悪かった事に謝罪もかねて」

『スキニシロ・・・』

些細な会話なのだろうか？（前書き）

すごい短いです。

些細な会話なのだろうか？

服を着替えて台所へ向う。

それにしても、喉が渴いたなあと思い水分補給がしたかったからだ。
台所へ向うための階段を下りていると、

「先生！」

小室君が階段を落ちるような勢いで下りてきた。

まだ、文句でもあるのだろうか？と身構えていると

「生意気な事を言ってますいません！」

いきなり頭を下げて小室君は頭を下げた。

「……え？」

突然の事に呆然としている間に小室君が喋りだす。

「実は……色々なことがありすぎて混乱していて、八つ当たり
するようなことをしてしまい」

「……いいよ、いつも続いていた日常が突然崩れてあんな出来事
に巻き込まれてしまったんだ」

そういうが、小室君はどこか納得がいかないようだ。

どうも、この年齢の子供は大変だ。

一つの事に真剣で悩み続けて、色々と傷ついて成長する……とい
う学園ドラマのような優しい状況もあれば、一人で悩み続けて人生

を終わらせてしまう学生も居る。

後者のような学生とは遭遇した事はないけれど――

“先生……たまに、息苦しくなるんですよ……どうして、この世界はこんなにも平和なんですか？　平和すぎて吐き気がする”

「小室君だけには……話しておこうかな」

「え？」

「実はね……」

俺は少し前まで――　数時間前まで思ってたことを――

「こんな世界になってくれて嬉しいと思っている自分がいて嫌になるんだ」

「どう……いうこと……ですか？」

驚いたような顔をして小室君が俺を見る。こんなことをいわれてとても戸惑っているみたいだけれど　当然か……。

「……複数居る人間の空間の中に狼がいたらキミはどう思う？」
質問を質問で返すような形で答えて小室君がさらに戸惑う。

「この言葉の意味を理解した所でキミに大きな変化が訪れるというわけじゃないでも――」

微笑んで、小室君の肩に手を置いて、

「キミのような子がこんな世界の中にいてくれたほうが俺は嬉しい……それだけいっておくよ」

若いときに悩んだ方が色々と成長するんだ。

でも――

「なーんかおじさん臭い事をいってしまったな・・・こんなことを
いっていると一気に老けてしまいそうになるから嫌なんだけど・・・
」

ぽつりと呟いてから俺は近くの鏡を覗き込んだ。
白髪が三本生えていた。

俺は平野君が見張りをしている部屋の中に入る。

平野君は武器を構えてスコップから覗き込んでいた。外の状況を把握しておこうという事なんだが――

「少し休んだ方がいい。疲れたら戦う事もできないよ」
別に戦えといっているわけじゃない。

けれど、今まで色々と苦しんできた彼の気持ち予測できる故の言葉だ。

近くの・・・かなり豪華なベッドに腰を下ろしてザルバを指にはめる。
俺とのリンクを一時的に断っていたため、現在充電状態にあるザルバは喋る気配がない。

疲れているのにさらに会話なんかさせられたら流石にしんどい。

さて・・・なにかやっていないだろうか？と思いつつ
テレビをつける。

「なにやっているんですか？ 先生」

「ん？ ニュースを見ているんだけど 変な事になっているなーと
思っ」

俺はテレビ（これまた大きめの画面）を見る。

そこには反対運動みたいな人たちが橋のまへの警官達に向かって叫

んでいた。

内容を聞いていると、どうやら奴らは“病気に感染した哀れな人たち”という認識をしていて情報を中々発表しない政府とかに反発しているようだ。

「バカだな・・・」

「え・・・?」

俺の呟いた言葉に平野君が驚きの声を漏らす。

「色々知っているわけじゃないが、ただ自分達の考えを一方通行で相手に叩きつける相手ほどバカな奴らはいない・・・そして、あいうヤツほど」

テレビ画面に一人の警官が現れる。

「早死にする」

警官が煽っていたヘルメットの男を射殺した。

「ふぁ・・・平野? 先生なにやってんだ?」

俺は咄嗟にリモコンでテレビのスイッチをきる。

「テレビを見ていたんだけど ニュースばかりでね 嫌になったからなにか録画してある物でも付けようと思って―」

「・・・外はどうなんだ? 平野」

「良いことなんか一つもない。悪い方がたくさんあるほうで さっきもニュー」

「うふふふうっ」

「んがっ！」

後ろからいきなり誰かに抱きつかれて俺はそのまま床に落ちた。

そう、文字通り落ちてしまう。

顔からもろに固い床に激突した最悪鼻がつぶれてしまったかもしれないと思ったらどうやら俺の体は頑丈に出来ているようだ。

「な・・・」

「へっえ!？」

頭上で平野君と小室君の声が聞こえる・・・なんか やばいものをみたような声だけれど、

俺は鼻の痛みで誰が居るのか見る事ができない。

呆然としていると、手が俺の両頬を掴む。

なんだなんだ? と思っていると

むにーと頬が引っ張られた。

「むによっが? (なんだ?)」

頬を引っ張られて混乱していると根源である鞠川さんはにっこりと微笑み

「かずよしちゃん」

顔を近づけてくる。ただ近づけてくるだけじゃないぞ!

「ぬぶっあ! (させるかあ!)」

開いている手で鞠川さんの顔を押さえる。

初心セーフ！みたいなことを叫びながら俺を必死に鞠川さんを抑えた。

「むう・・・」

俺に・・・することが出来ないと察した酔っ払いの鞠川さんは次なる獲物へ牙を向ける。

「こおおたちゃあん」

「へっ？ あ・・・その・・・」

「むちゅ」

声にならない平野君の悲鳴が上から聞こえた。

ごめん、平野君・・・と、俺は小さく手を合わせる。

OTHERSIDE

騒動で閑散となってしまった場所でぴくりと死体の一つがゆっくりと動き出す。

「んあ・・・ああ？」

少し呂律が悪いのかそいつは上手く喋れていない。

「・・・」

喋るのをやめてそいつは動き出す。

獲物を求めて――

SIDEOUT

些細な会話なのだろうか？（後書き）

今回、最後に新たな敵出現しました・・・。

実は、前の感想で二次創作はありきたりな展開が多いという指摘をもらったのですが・・・、すいません ありきたりな方が面白いと思って書きました。

もし、他にも気分が害した方がいらっしやられたら申し訳ありませんでした。

行動は計画的に（b y 小室）（前書き）

今回も短いです。

行動は計画的に（by小室）

「・・・銃声か」

『オオカタ、ドツカノダレカガヤツラニムカッテブツパナシテイルンダロウヨ』

薄暗い中、ベランダで見張りをしている。

空を見上げるといつもと変わらない空に月が浮かんでいてとてもきれいだ。

「空はいつもと変わらないのに、下を見下ろせば、奴ら、だらけ嫌な世界になったもんだ」

『ダガ、ワカラナイコトガヒトツアル』

「ホラーの事か？」

『ソウダ、アレハコノセカイニソンザイシナイハズノモノダ、ゲンニオマエガモツテイルケンニジャキガキュウシュウサレテイナイ・・・アレハホントウニホラーダッタノカ？』

俺が持っている剣、牙狼になった時は牙狼剣というんだがホラーを斬って倒した時邪気を剣に吸収して番犬所という所で預けるという場所なんだが、この世界には番犬所は存在していない。

「それよりもさ、この後の行動どうするんだろうね、ずっと―」

「先生、大丈夫ですか？」

「ああ、平野君 大丈夫だ・・・よ？」

後ろを振り返ると銃を持っていつものものほーんとした平野君とはどこか違う表情をした平野君が立っていました。
しかも頬には鞠川さんのキスマークがついたまま。

「どうしました先生？」

「いや・・・えっと」

『オマエコソ、ドウシタンダ？ ソンナヤセイミアフレタヒヨウジ
ヨウヲシテ』

「え？ そんな顔してます？」

メツチャしてます。とても素晴らしい笑顔ですよ。その顔で学校を歩いていたら紫藤や不良達を容赦なく威圧だけで倒せると思う。
俺もかなりびびったし、

「それで、外の様子はとうですか？」

「あまりよくない・・・、どっかの誰かがぶっ放した弾丸のせいで“奴ら”がぞろぞろと集まってきている・・・おや？」

「どうしたんですか？ 先生」

「平野、先生？　どうしたんですか？」

「小室君……あれをどうみる？」

「あれ……って、子どもと大人が二人……？」

僕らの視線の先には大人が一人呼吸を乱しながら一人の女の子の手を引いてある一軒家の中に入っていく。

ドアを叩きながら中に入れてくれと叫んでいる。

せめて、この子だけでもといっているが反応がない。

「あれ……やばいな」

「え？」

「どういことですか？」

『アノオトコ、ドアヲブツコワストイッテルダロ？　ヤツラガアツ
チコツチウロツイテイルジョウキヨウデムダニアイテヲシゲキシタ
ラ……』

ドアが開いて何かが男の体を貫いた。

『アイテガナニヲスルカワカラナイ』

「なっ！」

小室君が驚きの声を挙げると同時に男はそのままコンクリートの床の上に倒れて動かなくなってしまう。

「くそっ！」

「待って 小室君」

出て行こうとした小室君にストップをかける。

「どうするつもりだい？」

「どうするって・・・あの女子と男の人を助けに行くに決まっているじゃないですか!？」

『ムリダ、アノオトコハシンデイル。テオクレダ』

「それでも、あの女の子は助けられるだろう!？ 助けられるかもしれない子を助けられないなんて・・・そんなのは嫌だ!！」

「そうか」

俺は頷いて傍にある剣を手にとって、

「なら、俺と一緒に付き合ってもらおうぞ」

「え？」

「平野君 みんなへの伝達は任せたぞ」

動揺している小室君の腰辺りを掴んでそのまま担ぐようにして助走をつけて

「え、先生!？」

ベランダのフェンスを強く踏んで、そのまま――

近くの民家の屋根に着地する。

「うおっとお・・・」

「ちょっと先生！？ 無茶しすぎです！」

危ない危ない、危うく奴らのど真ん中に落ちる所だった。

俺は呼吸を整えて次々と民家の屋根を飛んで目的地へと向かっていく。

「さあ、小室君 出番だ！ 行ってこーい！」

「えっ、うおわぁ！」

俺はバットを小室君に握らせて少女を襲おうとしている“奴ら”目掛けて投げ飛ばす。

小室君は叫び声を挙げながらもバットを構えて“奴ら”の頭目掛けて振り下ろした。

血しぶきを上げながら“奴ら”の一体が倒れる。

俺も剣を抜いて小室君と少女を襲おうとしている“奴ら”の切り伏せた。

そして、入り口のフェンスに鍵をかけて小室君の方へ駆け寄る。

「だいじょう」

「次からはなにかいってください！ 死ぬかと思ったじゃないですか！」

「いやあ、小室君ならこれくらいいけるんじゃないかなあーって」

「勘弁してください。命がいくつあってん足りないじゃないですか
！！」

「パパあ！　　パパあ！」

少女の鳴き声に俺達は喧嘩をやめて、声の方を見る。
そこには死んだ父親に必死に泣き叫んでいる女の子、

「喧嘩は後にして、あの子の父親を埋葬しよう・・・」

「はい・・・」

俺達は死んだ男の死体を掘った穴に生めて埋葬する。

もし、このままにしておいて奴らの仲間入りやホラーの肉体の代替品とされたら哀れと同時に、安からに眠って欲しいという意味を込めての埋葬だ。

「最悪だな・・・保身のために人を殺しておいて何も思わないなんて」

男の人を殺した民家は電気を消して“奴ら”がいなくなるのを待っているのだろう。

いますぐにでも窓を壊して奴らを招き入れてやりたいという衝動を堪えて、

「それじゃ、このまま帰るのは難しいからあそこの塀を歩いて帰ろうか」

「待ってください!?! 先生のあの脚力があるなら屋根の上に飛べるのでは!?!」

「小室君、あれをやると筋肉痛になってしまうのだよ」

「え、そうなんですか・・・って、だったらなんでやったんですか!?!」

「子どもの危機だよ!?! 教育者として見過ごすわけには行かないだろう!」

「そうだとしても少しは考えて行動して欲しいです!」

『オイ、シャベツテイルトコロ・・・ワルイガ イヤアナシラセガアル』

「なんだ?」

『ホラーダ』

直後、“奴ら”の方から変な叫び声が聞こえてくる。

入り口のフェンスを壊して人の姿をしたホラーが現れた。

「っ・・・あいつ・・・」

入り口に現れたのはつい先刻テレビで警官に向かってデモ抗議をしていて射殺された男だった。

どうして生きてる?と思ったが、それは間違いで男は死んでいた。頭のかぶっているヘルメットにはぽっかりと穴が開いていて、体は

死臭が漂っている、

「小室君、少女を抱えて先に逃げてくれないか？」

「先生？」

「・・・悪いけど、“奴ら”に加えてあれが相手だとキミ達を守りながら戦うのは少しキツイ・・・だから」

「・・・わかりました。さ、いこ」

小室君が少女を背中に乗せて塀に飛び乗る。

さて、これは少しきついな？

ホラーを先頭にしてぞろぞろと“奴ら”が入ってきた。

この数は・・・きついかも。

そんなことを思っていると――

「お困りのようだね」

後ろの“奴ら”が吹き飛んで、何者かが現れる。

行動は計画的に（b y小室）（後書き）

楽しみにしていた人（何人いるかな？）またしてしまい申し訳ありません。

他の作品を手中していたら完全に更新を忘れていました。

今度も更新は・・・二月中にはやろうと思いますが、ホラー 牙狼 絶狼の三つ巴の戦いを予定しています。

三つ巴の戦闘

零SIDE

全く、ようやくあの神官のいつていた坊やを見つけたと思ったらホラーと戦闘態勢に入っているし、周りは“奴ら”がホラーの邪悪な気に感化されたのかうじゃうじゃ集まってくるという変な展開になっているし。

「ああ・・・めんどくさそう・・・でも、やるしかないよね」

俺は二本の銀色の剣を引き抜いて目の前に集まってきていた“奴ら”を剣で吹き飛ばす。

一言で吹き飛ばすといってもそうそう簡単に出来はしない。それが簡単に出来るという事はこの体のベースとなっているオリジナルはかなりの実力を持っているという事なんだよね？

「お困りのようだね？」

不適に笑うと、ホラーは敵意をむき出しにして小太刀のようなものを持っていた男は驚いた表情をして俺を見ている。

「始めまして、黄金騎士牙狼、俺の名前は零、キミと同じ魔戒騎士だ」

名乗りを上げて俺は牙狼の称号を持つ者へと切りかかった。

SIDE OUT

いきなり斬りかかって来た零と名乗る人物の刃を剣で受け止める。

「い、いきなり何をするんだ!？」

「いやね、俺もこういう事をしたくはないんだけどね。キミを鍛えろっていう命令受けているから実行しないといけないのよ」

「この状況ですることじゃないだろ！」

刃を押し返すと同時にヘルメットをかぶった男が俺に拳を振るう。横からの不意打ちに防ぐ事ができず後ろにある民家の壁に叩きつけられた。

「ぐふっ！」

内臓のどこかにダメージを受けたのか口から血液が飛び散る。

「カズヨシ！アイテハアイツダケジャナインダ、ユダンスルナ」

「わかってる・・・それに、早く小室君のところに戻らないと・・・」

剣を地面に突き刺して立ち上がる。

立ち上がったのを見て零はまた斬りかかって来たのを足で蹴り飛ばして、さらに襲い掛かってきたホラーの顔を剣で串刺しのように突き刺した。

「引っ込んでろ！」

叫んでホラーを遠く投げ捨てる。

勿論、この程度でホラーが死ぬなんてことはない、ただの時間稼ぎだ。

「悪いが時間がないんでね……あんたを倒して仲間と合流する！」

叫んで剣を頭上にかざすようにして鎧召喚をして牙狼へと姿を変える。

「ふふ……そうでないかね」

零は両手に持っている剣を頭上でかざすように動かす。

二つの円が零の頭上で一つとなりそこから銀色の鎧が現れて体を包み込む。

『ゼロ……ダナ』

「知っているのか？ ザルバ……」

『オマエトハチガウベツノケイトウノマカイキシダ。ナマエヲゼロ・カナリツヨイゾ、イマノオマエジャ、オソラク“カテナイ”』

ザルバは遠まわしに物を言うような事をしない、ザルバの言った事はおそらく真実なのだろう。

俺は牙狼剣を構えて目の前のゼロを見据える。

相手はこっちの出方を待っているのか動く気配がない。

「時間も少ない・・・行く!」

地面を蹴って牙狼剣をゼロに振り下ろすことなくそのまま通過して姿を変えようとしていたホラーの首を叩き落す。

そして、そのまま近くの塀を飛び越えて小室君たちが乗っている車の方へと向かおうとするが。

「がっ!?!」

背後から鋭い一撃が腹部を貫いてそのまま民家の屋根に体を叩きつける。

「及第点として・・・21点だね。ホラーを倒したことは良しとするけど、あれで不意打ちをついたつもりかい? 甘すぎるね。そんなんじゃ、これから現れるかもしれない強敵すら勝てないよ?」

「がっ・・・ぐっ!」

上に乗っているゼロを俺は払いのけて牙狼剣を振るおうとするが二つの剣で受け止められてそのまま頭突きをされそうになるのを空いている手で掴んで受け流すようにしてそのまま頭突きを入れる。

「・・・おっ」

「やられたまま終わるつもりなんて・・・毛頭ないんだよお!」

そのままゼロを背負い投げて俺は小室君たちの乗っている車目掛けてとんだ。

零SIDE

「ふう……動きは素人すぎる……少しは体を鍛えているみた
いけど、実戦経験が少なすぎるのが痛いね」

絶狼から零に戻り、牙狼が飛んでいった方向を見てポツリと呟いた。
周りには沢山の“奴ら”がじりじりと零を包囲しようとしていたが
ばたりと倒れ込む。

「どうやら死者となった時にホラーの返り血をあびたらすぐに死ん
でしまうようだね」

『おい』

観察している零の頭の中に直接声が響き渡る。

「……わざわざ、連絡するかい？」

『んなことはどうでもいい。お前なにしてくれちゃってんの？』

「え、彼を鍛えただ」

『私の大切なアイツの体に傷をつけたことに関して怒っているんだ
！』

ええー、鍛えろっていうのはそっちだよね！？と零は文句を言いそ
うになるがやめる。

どうやら神官は変なスイッチが入っているようで、こっちの言い分
を聞いてくれそうにない。

ちなみに零はお説教を聴きながら“奴ら”をずばばと叩き伏せていた。

いつもより荒い攻撃をしているのは鬱憤のせいではないと信じたい。

S I D E O U T

三つ巴の戦闘(後書き)

お久しぶりです。

不定期更新です。

お知らせ

愛読している人が何人いるかわかりませんが、お知らせをします。

今回こんな連絡をしたのは学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD 黄金騎士参戦を打ち切る事を決定しました。

理由としてはデータが勝手に消えたり、など諸々の理由があるので、一番としての理由は。

自分が書いていて面白く書きたいと感じなくなってしまった事です。

なんて自己中なヤツと思う人もいるかもしれませんが。

ですが、作者がやる気のない作品を人に見せるのも問題と思います。

更新を中断すれば良いと思うかもしれませんが、書いていて本当に面白くしようと思わなくなってしまうのです。

・・・もし、また面白く書きたいと思ったときに新しく、違う作品としてスタートさせるかもしれません。

本当に自分勝手なことをしてしまい、申し訳ありません。 断空
我。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3708n/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD 黄金騎士参戦

2011年10月29日17時22分発行